

2492-17

武術叢書

全

劍術不識篇

○客謂て云、子が劍術専空の一理を引て至極を不盡、尤も子が云所、甚だ高上也と云へども、初心の輩に至り難し、適々器量人有て上達するとも、唯一理のみ熟し、事を捨る時は、悟道の僧に太刀を弄はするが如く、心計り發明したりとも、事拙くしては物の用に達すまじ、昔より名將は田夫野人の營む賤き業を見て、則軍事に備て利を得玉ふ事不_レ少、さあれば賤き事とて不_レ捨こそ名譽の人と云べけれ、亦淺きを渡て深きに至り、早きを踏て高きに至ること順理なるべし、然らば先づ事を専らに勉てこそ、自然の理も熟得すべけれ、

師答云、客の言甚だ理也、予が初心の人を導く事客の言の如く専ら事を以てする也、雖然組物の形刀を敢て不_レ教、故に不_レ知者は唯理藝と云人多し、此門に入ば知れ難き所也、組物の形刀は皆組みたる約束の事也、眞實の事にあらず、因て最初の時暫く形刀を習はし敢て不_レ教、夫より眞實の事を教る也、此わざ

は理より漏れ出るなれば、専ら其大本の理の道に赴かしむるの術を云のみ、事を捨るにあらず、因て韜を持ち槍をも長刀をも持て稽古する也、事を捨るならば槍太刀等を持て稽古すべきやうなし、是を以て察すべし、大様世上の業と云は専ら組物の形刀を以てす、當流は其約束の形刀組物を敢不用、理より出る眞實の業、自然に應ずる道を以て示す、先づ始に是一理の懸口と云て、一理の門に入らしむるの事を以す、是より次第に一理の徳開るに隨て心治まり氣充ちて、自然に先づ臆病を去り、次に身際詰とて、敵に様々の構打突等有るほどの動きをさせて、是を空理に事を協へて詰めこむの術を教へ、次に空理水月の事、并に空理の間圖を知らしむ、熟する時、迎詰と云位に引く、是柳生流に云ふ處の法心也、向上極意畢り、又此上には深く心術に至て生死を離斷し、事理ともに捨しむる也、事理を捨るとは事理に無心なるを云ふ、無心なるときは唯一致の道にして、事理は自然の機に應ず、是を自證とす、既に事理自得に至ては、敵の位高下勝敗明かにして自然に見ゆ、況や士農工商の天地萬物皆悉く道に不_レ合と云事なし、

古昔の名人是を以てする歟、是衆の事に涉らずと云へども、萬物は皆一理より生するなれば、其大極の一理を明らむる故に如此か、槍の術是に至て廢して全し、是不_レ順哉、

○客の云、其極意に至ては左もあるべし、初心を引くには、子が云處我いまだ容れがたし、諸家皆形刀の手数を以て初中を分ち、奥に至て又奥の太刀とて形刀數々有り、先師忠なるべからず、先づ世事を以て論せんに、平士より頭人奉行様々遍參して後大將たらん時、其治甚委して利益遍かるべき事必せり、然れば世上所_レ有事を盡して、後子が組物敢て不_レ教如何、答云、卑きより高きに到る事、劍術に於ては組物の形刀也と君が深切に思事、諸大方の師の法なれば尤の事也、然ども日本に名譽を顯したる當流の祖紀伊入道を始め和州柳生宗頼先生、武州無眼元師、三浦政爲等、古今の諸流に超え、予が門弟も二三輩東武の諸流を窺見るに、皆極たる形刀有り相形有り、著にして終に手にたつものなし、是を以て知りぬ、右の先生敢て極たる形刀を不_レ好、流義の名と品は易ると云へども、其云ふ所符合するを以て知べし、さあれば理

を以て事を導かずば有べからず、組物の形刀計りにて仕立たる劍術は、印可を取て後も醉は醒ましき也、理に色臭相形なし、因て印可の段に成て一時に傳受成しがたき事必せり、故に初心の時より其人の心次第に事を出させ、其事を以て理を探り、虚を以て實に至らしむるに、初は理を見る事幽に如_レ絲如_レ霞、夫より積累の功成て自然に發明して上達し、事理ともに自得す、是を上手とす、終に反て理と特める物もなきに至て、大極とも無極大道とも云べし、是を名人とは云なるべし、此段に至ては寂然不動にして思慮に不_レ涉、耳目を不_レ借、直に感じ直に應ず、是徳鬼神に通ずる故也、然に右の通り初心より導てだに勝を好み負を惡むは人慾也、況や初心より勝事をのみ教る時は、益人慾增長して心險く形容不_レ常、或は惑て其知を昧まし或は怒て其仁を損ひ、成は懼て其勇を折き或は偽て其信を失ひ、其闘き事隣家に火災有るが如し、寂然不動などと云事には努々寄もつかず、一生修羅の奴とならんこそ痛ましけれ、されば人は元同性にして可愛の理有り、然に可_レ愛人に勝ん事のみ心にするこそ歎かしき業なれ、如此本心を昧まし邪

氣を長育しぬれば、第一人たる本意を失ふ也、唯人は忠孝の心を本とすべし、何程劍術に達、乃至天下中に人に勝つ事習ひ傳得るとも、輕薄暴悍にして人たる忠孝の心なき時は、危難の場に出會しては、忽仇を忘れ勢に附き苟も免るゝを幸とせん、如此節義を缺きなば、日頃鍛鍊せし劍術も何かせん、故に孔子も行己有恥を以て士とすとの玉はずや、去によつて武士は倦々として人臣の節を不失、事の變に遭はば節義を顯して武名を落さず、常變ともに國家の用たる人をこそ貴んで士と云ふべけれ、是に反すれば皆鬼畜にして甚賤むべき事也、又君が世事の喻へは、最も執行體也と云ども、是にこそ左に云所の二種有り、君が云如きは、先づ中間小者を十年もつとめて、其より足輕になり徒になり侍に成る者、頭侍大將奉行執事等其一道を盡く極めて後大君と成なば、上下貫通して其治殊に勝れんと思へる成るべし、小知小見の人は皆如此思へり、是はあまり理に過て迂遠し、是等の氣質有ては、よしや小者より段々厚祿をうけて登庸し、頭奉行と成り國の老に列したりとも、小利を目にかけて大道を見付る事なく、終には國家の敗を取

のみ、其上萬物を一々盡さんとする時は人間一生や二生にては萬物を盡し待てけんや、唯人一理を快く悟道しぬれば、萬物は不盡して自ら可_レ知、諸葛孔明は草廬より出て天下の安危を握り、漢の高祖は布衣より起て天下を平にし、二百年の治世たり、如此の類は倭漢とも其例不_レ少、是大道を見付れば其餘自然に明也、然ればあらゆる事のみを一事々々盡し_レて至らんと欲するは、甚廻り遠にして、是陋巷の云へる路草を喰ふ類也、予が組物の形刀を敢て不_レ好も、柳生大束に准ず、予が初心を引て卑を踏て高きに至らしむるは、則足を企てて直道を進み、道中に足を駐むる事なく、速に都に赴しむる事を要するもの也、上將軍の居ながら天下を知り玉ふ如し、論語爲政の篇に曰、縱は北辰其所に居て衆星是に向ふが如しと、是を劍術に取て見れば、中央の場にして八方劍の立所とす、中央は則不動の位也、儒道も中を以て極とするとぞ、又大學に曰、明德を明にするに有と、其大極を初に出して初學に示し、是を的にして修め行けば、下より格物致知誠意正心と云より、教學者に其標的の明德を射させんとす、劍術も一理と云明德の的を

始に出して、稽古は事を以て心を正うし、空の一理を探らしむ、因て陋巷も事より理あらはると云て、事は先き理は後なりと云も理也、されども至て見れば反て理より生ずる事也、如何となれば理は天地開闢以前の理にして、事は三才二生者也、然れば本也、事は未也、卑より高に至らしむるとて、其道中の景色産物地理人質等を悉く示さんとする時は、心是に着滯して末に不_レ行道、中にて果なん事必定也、それのみならず其道中の風景を以て是を興義と心得て而して後師たる時は、其過ち萬人の上に及ばん事可_レ悲の第一也、

○客の云、他流も至極の所は無我と云ひ無心と云ひ、思無_レ邪などと流々に於て其理を云へり、然るを易んぞ是を畜と云ふや、

答云、理に於て二つなければ、他流とて差違有るべからず、然ども此理と云ふ物は心に知り口に云時は等しく聞ゆれども、劍戟を取て其理を行へるを見ざれば、實否不_レ分物也、亦此理の説流々末々に至て格別に聞ゆる流義も不_レ少、如此差別有るを以て衆人迷ふ也、其流限りの理を以て云ふは狹し、其にて宜き理也と

秘藏するとも他流萬物に不_レ通片理にして、周き理には非ず、是小藝と云はん、君子は周して不_レ比、小人比して不_レ周とぞ、又喻に曰、盲人を聚めて大象を探らしむるに、各手に觸たる所を以て象の形を云ふが如し、或は背に觸たる者は象は如_レ床と云ひ、尾に觸たる者は象は如_レ繩と云ひ、牙に觸たる者は象は如_レ角と云ひ、足に觸たる者は象は如_レ柱と云ふが如し、盲目成るゆゑ象の全體を見る事不_レ叶、我が觸たる所を以て示す、流々の理利を云ふ事則如此、正理の全體を見る眼なきゆへ、流々に於て差別ありて諍ふもの也、理の融通廣大の變現を知らば、其諍もなく迷もなく皆以齊しかるべし、亦畜と云ふ事、小人は鳥獸のみ畜とすれども、凡て同性の人に勝んと思ふ事、即ち天狗界に墮落したるなれば是畜ならずや、其外妄想執念を不_レ離は、皆人體の鬼畜成るべし、所謂人面獸心成る者也、如此の鬼畜易んぞ直人の心を可_レ奪乎、○客曰、子が云ふ處、名人は不_レ争を以て道とす、然に古名人柳生宗頼の高弟本識三問答等の書を爲して其他流を嘲る、又頃日無三浦が末流大東良與劍術論を作て他流を罵る、今子が云ふも亦相同じ、是争を以

てするに非ずや、然れば自右を遣ひ他人を見下す、是則ち慢心の天狗ならん、

答曰、予自ら以て他を誹せんや、客の間に因て姑く其是非を解く物也、柳生無眼の二流ともに、敢て他流と争はんと欲して云には不可有、組物の形刀仕立の術は堪能ならず、道に達て次第に遠ざかりて味し、譬は縁木求魚が如く終に一生謬り通して真明徳を見る事不能を嘆き、是を世上執心の人にも示し、亦我門家に戒めん爲に、姑く自他の差別を云而已、尤も良興等堪能ならざるゆへ、藝を以道とする誤りも有り見えたり、唯道理を説くに當て不_レ論_二是非_一、不_レ分故に争に似たりと云ども、全劍術に於て不_レ争_レ勝の道有る事を云もの也、他流にも名人有るべし、諸流皆其先哲は名人なるべけれども、其次に至て不徳の師理を失ふより、形刀組物計りにて勝負を争ふ事なきにしも非ず、亦其中に不名人も出ると見えたり、三浦氏十八箇流の中にも、事一致の師なし、當時他流の師子が許に來る人も不_レ少と云ども、未一人も堪能成はなし、是人の知る所也、是を以て案するに名人は世に稀也、學術藝術ともに事理一致にあらずんば

何の益かあらん、予が云ふ所自己を貴んで云には非ず、唯是ならしめんとして非を云ふもの也、

○客曰、古昔より諸流と多く仕合を好み、國修行の劍術者も不_レ少、是等も柳生三浦に劣るまじ、然るに其名を不_レ擧るは如何なる事ぞ、

答曰、國修行武者修行の事二つ有るべし、一つには武藝執心の人、連年數流極むと云へども全勝の一理を不_レ悟、故に廻國して名師に値遇し其妙を得んと欲る者也、箇様の人は諸國諸流と仕合をしても勝ちたるを不_レ悦、負けたるを悦とす、如何となれば我に負くる人は我に劣る人なれば、我勝ても我に益なし、我に勝つ人は我に勝れる人なれば、我負て悦とす、是則我より高き人に出會て其高德を習熟せん爲の執行なるがゆへ也、既に其宗を得る時は謙て徳を懐にす、依て名不_レ顯、是真の執心にして難_レ有人也、亦一つには二三流にも打合見るに、己れが力量利根早業達者にまかせ藝に慢じ、他國他流を打て名を揚んと欲する者也、此人は前に反す、勝ちたる時は悦び、負けたる時は怒り、箇様の人は徳に悖て不得_レ道、畢竟は意趣を以て人を害し我も變死を取るもの也、是れ藝を以

て道とする人也、眞の執心に非ず、例の畜にして名聞の藝也、箇様の人と成らんより、一向に無手の素人の方益なるべし、劍術も至極の所は不_レ戰して自然に勝也、軍法にも不_レ戰勝を上とし、戰て勝つを中とし、教して勝を下とすとかや、理空なる物ゆへ眼前なれども見へがたし、因て執心の人廻國すと見えたれ、若しよく一理を發明する時は廻國何かせん、他を求る事を不_レ待して我に於て足れり、諺に歌人は居ながら名所を知ると言ふ類なるべし、

○客曰、予が言所悉く心術にして更に劍術に非ず、勝つ事を不_レ爲して唯心を修せんとならば、經論聖教文學を悟らんにはしがじ、劍術を以てする事不_レ審也、

答曰、萬能よりも一心に不_レ如と云事あれば、劍術を不_レ爲とも一心を悟んには不_レ如、元來刀劍は世の凶器にして不可用、然ども宜く用る時は世の吉を助る也、是則殺人刀を以て活人劍とする也、亦劍術は小藝也、曷んぞ道とせんや、雖然予武士の家に生れたる職分成れば、刀槍を業とするに、能く理に達する時は家業むなからず、亦文才を以て不_レ爲とも自ら試みて道を學ぶの眞理に達す、是を以て大也とす、其故

如何と云ふに、劍術は打太刀の相手を立て、するゆへに、徹歴にても過有る時は相手の人答_レ之、是打太刀に立たる人即ち生たる書箱也、斯く云ふ時は劍術を以て道とするに似たりと云へども、全く道とすにあらす、道を得るに至るを以て大也と云而已、總じて劍術を以て道とし文學を以て道とし神書佛經を以て道とするは不_レ道、唯其物をして道に至るを以て爲_レ遺_レ之、唯きはめて劍術と云名を遺れたるならば、反て其術全からん、孫子に所謂百戰百勝非_レ善之善者、勝つ事を不_レ爲時は全勝を得るの理必然たり、勿論心術に有らずんば曷んぞ萬物の徳を明めん、何程劍術上手なりとも一心不_レ治、敵と立會て心様々に動き亂て、日來の術も行ふべきの主無るべし、劍術は帶刀する者可_レ知の第一也、焉可_レ不_レ勉哉、我本來の心を悟り生死に於て無心なる者は、敵に會しても平常にして心轉倒せざる者、無礙自在を得る也、凡て劍術は己れ人に勝つ事也と思ふ事小人の心也、人亦己に勝つ術如何にもせん、其時一方勝ちたるは幸にして勝つと云もの也、全勝と云ふ物には非ず、唯理致を修して心に物なく寂然たる人は、全勝を得る事必せ

り、自然天數つきて死するとも、清々然として其死美しかるべし、勇士不忘_レ喪_レ元とて、士たる者生死を深く致すを以て善とす、故に名將は死の場に臨では醜_レ働を不_レ爲_レ從容として死に就く事、月花に對するに倅し、是死に於てもと無_レ心、生に於ても無_レ心也、志士仁人求_レ生無_レ害_レ仁、殺_レ身以_レ有_レ成_レ仁、是則聖人生死一貫とする所にして、死に有ては死の道を盡し、生に在ては生の道を盡す、然時は於_レ生自在也、於_レ死自在也、

○客曰、諸流に間を切ると云て、形刀の終に二三篇切りもあり、亦打太刀の人も無く、獨り間計り、或は百振千振毎日如_レ斯切つて稽古す、劍術は間を切らざれば用に不_レ立と聞けり、子が流には不_レ用乎、

答曰、子が流は初心より極意に至る迄、打程の太刀皆以て間に非すと云事なし、間とは敵と我との間、空理也、子が流空理を示す事は、俗に云ふ時は間の事也、併し相手の打太刀の人もなく、唯獨千振二千振日々切るを間と名くる事難_レ心得、是は更に間と云ふものには非ず、定て手の内を定めん爲か、又は手の利に專とするなるべし、さある爲ならば先づ可也、去れ

ども定りたる間は敢て得分なし、若又間をして敵を打拉_レがん爲ならば大に不可也、子が教とする間は、延る時は限なく、縮る時は一毛の中に入る、延ぶも縮まるも敵と我との遠近過不及なからん事を修するもの也、斯の如く理を籌らざれば、或過分或は不足なるもの也、亦劍矢當の位に至ては間と云ふ名も失也、間とは物に對する名也、無我無敵の本然に至る時は、間の心即迷なりと知るべし、他流の間と名づけ、獨り力を出して鐵壁を切り摧_レぐ程に手の内利たりとも、過不及有る時は何の効かあらん、益少なき事にや、

○客曰、諸流に口傳受法と云事あり、子が流に無_レ之は何ぞや、

答曰、是則形事仕立の劍術に數多有_レ之、此習傳授の事は素人に出會ては益有る事も有るべし、中位以上の人には難_レ用、其故如何と成れば、其師たる人の工夫して、是こそ否といはんぬ事など思付、利方を以て拵たる事也、然れば全く人智より出でたる事分明なり、當流空觀理致の徳は神明に通ず、中々人智の能く及ぶ所に非ず、受法の事、梵字、九字、十字護法、因明等佛家に入て受傳へ、夫より門弟に傳法する

也、尤正法にして可_レ信の法なるべしと云へども、例の勝つ事を好み、人を害する等の爲に行ふものなれば、是亦忿心_レを以てする故に其驗あるべきやうなし、簡様の事どもを恃みにして劍術の上に用ふる事甚危き事に覺ゆ、兎に角に品多きは必其流の衰へたるゆへ也、其故は一理空觀神靈の位を得ざる時は、與義の段に成て弟子に可_レ教の法無_レ之、依て組物の形刀數々に成て、至極の段は咒法口傳等其外様々の習修修を以て仕舞をつけるより外なし、是流の衰へたる事必せり、喻ば國家に政衰たる時は必法度多く出づるが如し、聖人の天下を治むる時は法度三品に不_レ過と聞けり、柳生流の書に云ふ如く、數の習は濱の真砂の如しと云ども、畢竟は西江水一つにてすむと有れば、強て萬物を盡さんとする事甚拙き事也、云は_レ萬流は皆小川也、此一河に據て其利害を以て萬川に争ふ事甚狹し、修して早く西江の大海に至て萬水を一

つにして一口に呑むべし、萬物は一より生ずるなれば、其本元の無慾無我の一を悟りぬれば萬事埒明く事分明也、或は祈禱太刀或は精進太刀或は太刀腹卷、其外瘡疾ををとし、或は狐つきををとし、或は血留

魚骨を抜くの咒、其外種々の咒法なんどの事は、救世爲なれば知て雖_レ不_レ惡、劍術の用には無_レ之事も、然るに是等を劍術に取付て奇也とする事可_レ笑事也、所謂邪は正に不_レ敵、正法に奇妙なしとて、眞に正なる者には邪は不_レ得_レ施、唯水の日に向て消ゆるが如し、人此理明らか不_レ成故、惑ある愚の然しむる所也、然るに門弟益愚にして信を取て受傳す、宜なるかは奇に倚り亦利を貪るゆへなり、子が流は以_レ傳爲傳不_レ足、唯以_レ叶爲傳、入_レ道祐_レ心忠云々、

○客曰、子が教ふる所、組物の形刀を敢て不_レ好と云ども、懸口より身際詰等の術、敵の構打突事に應ずる事、是も例の組物形刀の如くならん、其故は簡様の構には角して懸り、角打てば兎して應じ、彼の構には此表裏有りとも、心得なんど種々有るべし、然ば組物に倚て敵の心を察するを初心の習方とするに非ずや、

答曰、客の云所大體は似たりと云へども、子が教方とは大に異也、諸流共に、構は上段、中段、下段、相捨、暗眼、截甲など、此外色々有て、其變化の事幾らも有べし、亦表裏の品數を不_レ知、他流多く是れに心を盡し

て種々の事を好み、思量の不及所は護法因明等を以てすると思えたり、是劍術の大病にして迷妄の至極也、箇様に心を摧く時は心の動亂不止、終に明德不顯、互に知恵を振ひ、反て心の儘に打出す事なりがたく、見合に成て時刻移ると云へども勝負不分、終に見事なる働なきもの也、世上に喧嘩刃傷或は主親の讐討等多分此類に聞ゆ、是れ知は明德の蓋と成て神靈是が爲に不證、六韜に曰、大智は不智、大仁は不仁、大勇は不勇と、唯是天理にして自然の智、自然の仁、自然の勇は廣大の徳なれば、中々小人の眼に見ゆるものに非ず、是を以て不智不仁不勇と云ふなり、中庸に曰、君子は居、易以俟命、小人は行、險以徼幸ともこれあり、予が導く所も、先づ私智を去て空理を觀見せさする時は、自然の域に赴く也、然る上は俟命にして、敵何程の構をもせよ、其構の法に位して空理の間より打つ、亦敵變化するにも思量分別を不用して、唯端的にそれへ應じて少しも白眼合すことなし、思量分別を離れて變化に應ずる事如神なる事は、無心無着にして唯空理自性の光明遍照するゆへ也、既に敵と切結ぶ時に至て思量する間は

なきもの也、依て分別を不用して自在成る事を、初心より豫め稽古する事也、此上なは玄々の徳は、愈思量を不用、敵の構八相は八相、晴眼は晴眼、捨は捨と、當體を不動、唯見たるまゝにして分別を不用、一理融和して徳を以て推す時は、敵も無心に成て不働、自ら變化する事不成就もの也、是皆理の致すところ、神明らかにして更に私なし、故に他流の教方とは遙に異也、依之勝利を貪る人は、初心の中當流を不貴、自ら稽古を止むる人多し、去ども極たる形刀を修する時は、心も形刀も極て不自在也、當流は事も形刀も心に無極にして自在也、此理を觀せずして事を專とする者は、繋げる犬の柱を廻るが如し、

○客曰、一切の事心を以て主とす、心より不求事成るべからず、曷んぞ無心と云て心を廢て劍術なるべきや、

答曰、然り、一切心の外なし、然れども君が心とする心は和心也、予が無心と云所は本來の心也、本來の心は形刀も色も臭も影もなし、是を無心と云、此本心本來の空と内外一致に成て靈々たるを本極の一理とも云、和心は影形有て萬物に觸て穢る、私心を以す

る時は不可得、盡萬物、無心を以て爲す時は一理に歸し、内外清淨にして萬物に不穢不犯、世、老子曰、天は得一以て清、地は得一以寧、神は得一以爲天、天下の貞は其致之一つ也、得一なき時は天下清き事無し、天清き事なければ恐裂、地寧き事なければ恐動、神靈なければ恐滅、王侯貞たる事なければ恐蹶、是を以て見る時は劍術も得一以靈明也、然るゆへに變化の應用無礙自在也、一つを得ざれば精神不靈、不靈時は事理ともに味し、味き時は彼我不分、不分時は二つと成る、二つと成れば争あり、争あれば勝負あり、亦云、道生一、一生二、二生三、三生萬物、萬物歸一、一つは大極也、二つは天地也、三は三才也、是皆大極空の一理の無より有を生ず、道は無物の始にして自然の理なるをや、然れば修して是に不至は、劍術の妙は不可得、

○客曰、本來劍術に於ては勝負の事也、假令一を得たりとも勝事を不要、勝捨て全勝と云、予未解、答曰、老子に、上徳は不徳、是を以て有徳、下徳は不徳、是を以て無徳とかや、劍術も勝を失て自然の

勝有り、勝を不失時は皆負に成也、勝を失て勝事は唯一理の然らしむる所にして無我也、勝を不失は人慾にして有我也、亦曰、上徳は無爲而以無不爲、下徳は爲之而以有爲、劍術に取て見れば名人は千變萬化すと云へども、事に心を容る事なく唯無心也、無心なるがゆへに無爲と云々、敵の表裏種々の事に心不染のみ、神道に六根清淨と云事も此儀を以ての故か、是を當流に事を捨ると云ひ、事を捨る時は而も事不達事なし、是無不爲と云ふに合へり、勝を好む者は心中に例の習傳授傳法を念じ、事に心を容て構位を立て、甚勝を不失、ゆへに形像凝り極つて敵の表裏に心染凝滞して不自在、皆負となる也、事に心を容る時は無心自然の位にあらず、事と理と不化、敵と我と不化、物と不化、時は二つと成て相争ひ自在を得る事なし、今日人事を以見るべし、柔和にして物に不悻、道理に發明する人は、天下に敵なく、常に天下の中の人に勝居て自在也、又剛堅にして人の性に悻ひ道理に盲昧なる人は、到所物に悻て不敵と云所なく、常に大負を取て不自在也、されば曾子の言にも戒之戒之、出乎爾者反乎爾

者也、善惡共に皆己に出る事は皆己に反る也、且化は天にして不化は私也、順は天にして不順は私也、因て柔は能く剛を制すとも聞けり、夫れ可_レ我討_レ可_レ我勝、論語に云、季康子政を孔子に問曰、如し殺_レ無道_レ以就_レ有道_レ如何、孔子對曰、子爲_レ政焉用殺、子欲_レ善而民善、君子德風也、小人德艸也、艸上_レ風必偃とぞ、是を以て云時は、劍術も殺を用ひ勝を以てするは愚なるかな、寂然不動にして理徳を推す時は、我勝を以せずと云ども唯敵の假也、大仁は殺を不用、人々自己の罪に亡ぶる、

○客曰、悉く得心す、然れば劍術は此運籌流に柳生流に無眼流の二三成べし、他流は修しても危き事に覺ゆ、

答曰、客謬れり、本來一流にして自他の差別なし、前條にも述る如く、易ぞ自流を以て是とし他流を以て非とせんや、然れば私の沙汰にして公の論には非ず、只柳生宗頼、三浦政爲等、近世衆に秀でたる名實有るを以て是は、事理一致の教法知ぬべし、さあれば道に近しと云のみ、何の流にも理を致す、發明せる人は美とすべし、可_レ貴、今人勝利のみを専とするを賤み

悪むもの也、此外何れの事にも此衰弊なきにしも非ず、孔孟の徒も近世競ひ起りて萬派に分れ、道徳仁義はすたれて只文字而已に陥り、形容計を弄_レことには取りたる也、源遠して未益分れて、聖賢の世を去る事久き故に此の如くにはなりし、吾劍術も其如し、其人亡びぬれば唯萬派に分れ、流儀の徳は廢て只組物の形刀計り貽りぬるぞ、不_レ悲乎、

○客曰、子の云ふ所悉く識得す、然れども予今識得したる如くに其術なり難し、是如何、

答曰、凡て文字言語に渉るは理の迹也、全正理に非ず、其迹に因て無_レ迹物を悟るべし、故に禪家には不立文字と云はずや、凡て見る事聞く事意識に落つるに因て、心には自在を得るの道理を知れども、更に心の如く成りがたく、學術も聖經賢傳を暗記する人多しと云ども、道を見付る人なき故、聖賢に至る人少也、兎にも角にも此意念と云大病、靈明の開る期有るべからず、

客曰、意念を去り恃む所を離る時は、唯萬然として取認なし、如何して正理に至らん、

答曰、容易倉卒に成りがたし、故に前に云如く、初心

より事と理と一致に修行誘引也、されば一生見事難し、正理は不可_レ求人、文宣王の曰、君子は躬に求む、小人は人に求む、

○客曰、然らば劍術も至極の處は不_レ傳乎、

答曰、至極の處は師も傳る事不能、勿論自得の場也、こゝに至らしめん爲に前の如く導くもの也、學術ともに至極の所は自得るにあらずんば玄々の妙は證るまじき也、自證玄妙なる所、則劍術の法に取て西江水とも劍矢當とも有無一刀とも名づく、然るものなれば、師々弟々永く不_レ傳して終に組物の形刀計り貽し傳へて、西に有る物を東に求るも理也、然るに當世彼は劍術の家、是は槍の家などと云ふ事、可_レ咲事なり、徳は極て永く傳る物にあらず、唯因_レ其人_レ不_レ因_レ其家、

○客曰、玄妙に至りては如何なるものぞ、

答曰、不_レ知、

○問、然らば愚なるものか、

答曰、不_レ愚、唯如_レ知如_レ愚、

亦問、其故如何、

答曰、如_レ知にして不_レ知、唯不_レ知、

劍術不識篇終